

残り30日。その1

さて、センター試験への仕上げの時期となった。この1ヶ月は、センターの過去問に集中であります。

なぜ過去問なのか。解り切った過去問をやるより、ほかの問題をやったほうが良いのではないかと聞かれれば、その秘密をお教えしましょう。

過去問は、何年か前から、前年度までの作問方式をいわば踏襲して作られています。センター試験など、50万人規模の公のテストですから、一つの大学で試みられる新しい傾向とか新しい作問方式とかについても大きなハードルがあるのですから、ましてや難問奇問とか、新しい傾向とかよりも前例踏襲型の作問方式となることは否めません。特に、平均点をどのくらいに設定するかについて、かなり厳密な検証と、通常認識には到底及ばない様々な議論が重ねられて行くはずで

す。つまり、過去問には、そのさまざまな配慮と作問意識が反映されているのです。過去問を何度も解くことで、その問題の背景にあった作問組織の意図を感じることが大切なのです。

なぜなら、その背景の作問意識は、何年も何年も受け継がれてそこにあるのです。その作問意識と意図とを知ることによって、次の問題に流れているだろう作問意識と意図を知るという重要なファクターを身に着けることができるのです。

さらに話を進めると、例えば「国語」の場合、マークテストは、文章を読むということと、正答を選択するということが解答の作業が分かれているのであり、正答を選択するという作業の中で、一つの正答からどのように他の4つの誤答が作られるのか、そこにどのような意識が織り込められるのか、受験生をどのように試そうとしているのかをきちんと感じることにによって、正答を選択する仕方が感じることができるのです。逆の、誤答を選択させようとする意図も見えるのです。

20年分の中で、大きな変遷の時期を意識しながら、その80分のテストの平均点をいかに何点上回ることができれば、ほかの受験生との差を生むことができるかがわかります。

平均が200点満点で、120点近い時には、180点ぐらいの点数が必要になるし、平均が100点そこそこの年であっても、特定の大学の特定の学部においては、160点以上が必要であったとの見方が解るのです。

各教科について、細かなその分析ができていれば、おおざっぱに8割とか9割とか取るだけでなく、8割とか9割取る意味が分かり、2次試験への大きな橋渡しにもなるのです。

逆に、失敗がどれだけ許されるのかもわかります。そのくらいセンター試験に詳しい取り組みができると、もはや、大学入試はこちらの勝利です。